『人文』3号　訂正表

頁	行	誤	正
91	16	中島建蔵	中島健蔵
145	37	高杢	高埜
175	1	はンガリー	ハンガリー

「左翼くずれ」からの脱却
――高見順の転向と戦時体制の進展――

桑尾　光太郎

はじめに

高見順（1907～1965）は、プロレタリア文学運動に参加し、1933（昭和8）年1月、治安維持法違反容疑で検挙された。長期拘留を経て運動からの離脱を誓う転向をおこない、釈放されて起訴留保処分を受けた。その後、左翼くずれを主人公とする小説を発表し、1935（昭和10）年に「故旧忘れ得べき」が芥川賞候補となった。高見が描く左翼くずれの特徴は、運動から脱落したことで非転向の左翼に対する強いコンプレックスを抱きながら、完全に思想を棄てて体制に順応することもできず、情痴や頽廃に身をおくところにあった。その屈折した姿勢を通して、高見は社会的弱者＝「路地の生活者」への視点を得るにいたった[1)]。

本稿では、転向を契機として形成された左翼くずれの姿勢が、日中戦争以降の戦時体制の進展のなかで、いかに変容していくかをみていく。よく知られるように、中島建蔵は1939（昭和14）年に、「高見順の時代という時代があったといっても、けっして不当ではない。高見順の時代はたしかにあった」[2)] と述べた。中島のような同世代の知識人からも、高見は時代の向背を象徴する作家と目されていたのである。高見順と高見を取り巻く現実――言い換えれば個人と時代状況――との関係を検証する作業は、昭和戦中期における知識人のあり方の典型をみることになるであろう。

1　「外資会社」における転換

平野謙は、自身の初の本格的な評論として「文学の現代的性格とその典型――高見順論」（『人民文庫』1937年9月、9月臨時号）を発表した。平野は高見の創作活動について、「すべてマルクス主義退潮後における破砕された自我再建の苦しい模索のうちに、その本質を証しているのだ」と評し、当時高見の最新作であった「外資会社」（『新潮』1937年7月）に注目して次のように述べている。

かなり曲折にとんだ自我再建の右往左往は、ようやくここにカチリと響くひとつの手

応えを見出したのである。

しかし、作家発展の道はつねにジグザグな曲線をたどる。『外資会社』が正統な意味でひとつの新しい出発であるかどうかは、すべて今後にかかっている。高見順がこの『外資会社』をひとつの礎石として、今後どのような方向に道を切り拓いてゆくかは、私にとって単なる興味や関心以上のものがある。

「外資会社」の主人公茂子は、就職試験のため外資系レコード会社に向かうバスの中で、その会社の二人の社員に出会った[3]。一人は「その眼は黄色く濁ってきて、光りが」なく、「窪んだ眼窩は黝いくまを沈ませてゐて、腐つた沼のやうな感じ」の金原、もう一人は「三十をちよつと出たばかりの、色の浅黒い精力的な顔をした」戸澤である。茂子はレコード会社に採用され、二人と同じ宣伝部のタイピストとして働くことになった。金原は「学生時分マルキストだつたが、今ぢやどうやらニヒリストですね」と自嘲し、これもかつて左翼だった茂子の兄と同様に、「いつも何かとブーブー言つてゐる」。高見の作品ではおなじみの左翼くずれであり、疲れれば疲れるほどその饒舌が激しくなる。高見の人物造形において、左翼くずれがいかに「くずれ」ているかが関心事なのであり、その前提としていかなる左翼であったかは重要ではない。「外資会社」でも、金原が過去にいかなる左翼で、どのような経緯を経て現在に至るかは一切説明されていない。他方、戸澤はそれまでの高見の作品には登場しなかった、仕事一途という意味でのニヒリストで、「ぐいぐいのしていく感じ」で仕事をこなしていく。金原をはじめ同僚の社員は戸澤を疎んじていたが、「会社を足の下に踏んまへるやうな」戸澤の働きぶりに、茂子は強い魅力を感じた。

「外資会社」では、茂子を狂言廻し的な存在にして、金原と戸澤、加えてタイピストの壬生八重子の人物像が描かれ、一見リベラルな雰囲気の社内に存在する、待遇面での人種差別などの矛盾がしだいに明らかにされていく。その結末では、レコード工場での争議の場面が登場する。本社の経営陣との談判に向かう従業員代表に、本社の社員からも声援が飛ぶ光景を眼にして、茂子は「嘗つて感じたことのない、生れてはじめての感動に」胸を詰まらせた。他方で、争議に何の関心も示さず「人々の群つた窓に背を向けて、ずりこけるやうな恰好で回転椅子に腰掛け、足をながながと床に踏み出し、不貞腐つた風に腕組みをして眼をつぶつていた」戸澤に、茂子は激しい憎悪を感じた。そして、廊下で茂子とばったり出会った金原は、「見るからに悄気た陰惨な顔をしてゐたが、すつと伏せた眼をドギマギとしばたくその顔を茂子から隠すやうにしてソソクサと立ち去つた」。主人公が争議を目の当たりにし、左翼くずれと仕事一途のニヒリズムの両方を乗り越えていくという結末は、かつてのプロレタリア文学の名残りをとどめている。日本プロレタリア作家同盟（ナルプ）時代から高見と行動を共にしていた石光葆は、「外資会社」について「『転向した』とはいいながら、依然として左翼に同調している高見の思想がここに語られているのである」[4] と評している。

「外資会社」は、階級意識に目覚めた茂子が「悄気た陰惨な顔をした」金原と出会う場面で終わるが、これは左翼くずれを乗り越えようとする高見の意欲をうかがわせる。平野謙は、そこに自我再建の手応えを見出した。けれども山室静が「高見順断片」(『人民文庫』1937年8月)で指摘したように、左翼くずれにおける最もラジカルな側面は、「身体ごとそこに自らを投げ出して、すべての小賢しい自己救済の方法の放棄の果に、頽廃と錯乱の生理が描く線に沿うことで、氏が一種の逞しい造形力を獲得した」点にあった。左翼くずれの情痴や頽廃の内に、左翼運動に対しても、また既存の体制に対しても「臀をめくつている」(平林たい子)ニヒリズムが存在し、卑屈でありながらも何ものにも依拠しない反逆性をみせていたのである[5]。左翼くずれを乗り越えようとする意図は、自我再建に向けての手応えであるとともに、反逆精神の衰退を予兆させるものでもあった。

2 『人民文庫』と「散文精神」

1936(昭和11)年3月、武田麟太郎を主宰者とする文芸雑誌『人民文庫』が創刊された。執筆者グループには、高見順をはじめとする『日暦』同人(新田潤・荒木巍・矢田津世子・大谷藤子・渋川驍・田宮虎彦・那珂孝平・石光葆・古澤元・円地文子ら)や、『現実』(第二次)の同人である本庄陸男・細野孝二郎・上野壮夫・湯浅克衛・平林彪吾、さらに堀田昇一・松田解子・田村泰次郎・南川潤・間宮茂輔・竹内昌平らが加わった[6]。その多くは、高見と同様にナルプで活動した経歴をもっていた。

『人民文庫』創刊に先立つ36年1月、文芸懇話会の機関誌『文芸懇話会』が発刊された。文芸懇話会は、内務省警保局長松本学が中心となって1934(昭和9)年に創設された文学者団体で、「非国家的文士」を排除する形で文壇作家の糾合が試みられ、三上於兎吉・菊池寛・吉川英治・島崎藤村らが会員となっていた。こうした思想・文化統制の動きに対抗する形で、「進歩的」と称される雑誌や新聞が、かつてのプロレタリア文化運動の担い手たちによって編集発行された。『労働雑誌』(1935年3月〜36年12月)や、『文学評論』(1934年4月〜36年8月)、『社会評論』(1935年3月〜36年8月)、『文学案内』(1935年7月〜37年2月)などが代表的な例であり、『人民文庫』もそのひとつに数えられる。

『人民文庫』の初期に掲載された創作には、『日暦』から引き続いて連載された高見の「故旧忘れ得べき」(36年3〜5、7〜9月)をはじめ、「呪文」(細野孝二郎)・「感情記録」(那珂孝平)・「起生妙薬」(古澤元)・「マイナスの部分」(堀田昇一、以上36年4月)、「肉体の罪」(平林彪吾、36年6月)など、自らが経験した左翼運動を背景とする作品が多い。こうした作品は、弾圧・転向や貧困・男女関係のもつれなど、運動に内在する矛盾を題材としていた。これは「階級闘争のための文学」という大義名分から外れた、生身の人間の姿を描こうとする欲求であるとともに、マルクス主義を完全に清算できないでいる旧プロレタリア作家の心

情を端的に示している。高見は「故旧忘れ得べき」を『人民文庫』への連載によって完結させて、同誌発行元の人民社から単行本にまとめ36年10月に出版した。また、執筆者グループの一人としてエッセイや六号記事を執筆し、座談会などにも積極的に参加した。

武田麟太郎は、『人民文庫』刊行の目的として「文芸懇話会の排撃、リアリズムの正統的発展、旺盛なる散文化、つまり約言すれば文化の擁護と正しく高い性質の小説の大衆化」[7]を挙げた。初期の「六号雑記」欄には、毎号のように執筆者グループによる文芸懇話会攻撃が掲載されている。また『人民文庫』は、同時期に発行された『日本浪曼派』(1935年3月～38年8月）とも鋭く対立し、「六号雑記」や執筆者グループによる座談会「若もの一席話」などで、しばしば『日本浪曼派』攻撃がおこなわれた。戦後、高見は「『人民文庫』と『日本浪曼派』とは、「転向という一本の木から出た二つの枝だ」[8]との発言をおこなったが、当時は『日本浪曼派』批判の先駆的存在であった。『コギト』1934年10月号に「『日本浪曼派』広告」が発表されると、高見は「浪曼的精神と浪曼的動向」(『文化集団』1934年12月）で、その「現実への自我の拡充ではなくて遊離する傾向」をいち早く批判していた。

『人民文庫』は、旧プロレタリア作家にとって貴重な創作発表の場となると同時に、文芸雑誌の範囲に止まらず作家の社会的役割を強く意識していた。その意味では、プロレタリア文学運動のスタイルを継承していたといえる。執筆者グループは、世相や社会現象・日常生活などに関する話題について積極的に発言し、36年9月号から時評欄「市井談義」が設置された。たとえば武田麟太郎は、流行歌「忘れちやいやよ」が発禁処分を受けたことについて触れ、「私はここにまで国家統制の触手が延びて来たのに些か唖然とする。しかし、唖然ともしてゐられない。反対だと云はねばならぬ」[9]と言い切っている。

また、他の「進歩的」誌紙にもみられるように、『人民文庫』は読者との連絡を重視した。読者投稿欄を設置し、読者参加の座談会などを掲載するとともに、執筆者グループが講演・座談会をおこない、各地で読者会が組織された。武田は「地方めぐりの講演会をやりたいと思つてゐる、地方の読者で連絡を取つてくれゝば、こちらから諸君の希望の員数または顔触れを出して、未知の読者諸君と大いに交歓の実をあげたいと思つてゐる」(「編輯後記」1936年5月）との抱負を示し、「地方に本誌の読者会が自然発生的に出来てゐるらしいが、出来れば本社と連絡を取つて貰ふと便利だ」(「編輯後記」1936年7月）と呼びかけた。武田と高見は36年5月に北海道・東北地方を回り、岩手県の三陸山田港では読者会が『人民文庫』20部を購入した[10]。同年10月から11月にかけて、甲府・東京・大阪で規模の大きな講演会が開催され、京都・名古屋・静岡・神戸・岡山・松江などでも30名から50名を集めて座談会がおこなわれた。講演会の概要は以下の通りである[11]。

山梨講演会

日時　10月16日

場所　山梨県々会議事堂
講師　武田麟太郎　高見順　松田解子　新田潤　田村泰次郎
主催　山梨文化聯盟　女子商窓会

東京講演会
日時　10月18日午後5時
場所　築地小劇場
講師　広津和郎　青野季吉　島木健作　立野信之　平林たい子　武田麟太郎
　　井上友一郎　荒木巍　高見順　大谷藤子　矢田津世子　円地文子
余興　「震撼された易者」(『人民文庫』9月号所載)
主催　人民社

大阪講演会
日時　11月3日正午
場所　土佐堀YMCA
講師　武田麟太郎　高見順　島木健作　湯浅克衛　立野信之　本庄陸男　古澤元
　　新田潤　平林彪吾
主催　人民文庫大阪読者会　後援　関西作家クラブ

甲府での講演会は、「農村からも多数の来会者があり聴衆三百余名を得て会議所の大ホールを埋め非常な盛会」で、会の後に約50名が集まり座談会が開かれた。東京講演会には約600名が参集し、「築地小劇場の規定席を埋めつくし補助椅子をだしても間に合はなかつた」という盛況であった[12)]。大阪講演会には350名余が集まり、その中の一人であった宮西直輝は次のように回想している。

その日見た武田麟太郎ほど強烈な個性をもった魅力ある人物を私は知らない。

最後に壇上に立った彼の話は、講演というより締めくくりの挨拶のようなものであったが、その声量、迫力、不敵な面構えなどまさに千両役者の出現であった。(中略) 演壇の袖にかくれている特高の存在など、歯牙にもかけない不敵な面構えで、

「たとえいかなる権力者がいかなることを企(たくら)もうと、庶民がそれを望まず、庶民の共感を得られないようなことは絶対成功するはずがない。『人民文庫』は庶民の雑誌だ。庶民の心を尊重し、広く庶民の共感を得て、庶民とともに闘う。これが『人民文庫』である」

私達はいつまでも彼の口からこんな話を聞いていたかった。左翼の公式的スローガン

めいたことは一言も喋らなかったが、そのファシズムと戦争を憎む彼の熱い思いは、私達の胸にビンビンと音立てて響いてくるのであった。聴衆は上気し彼の言葉に酔った[13]。

「外資会社」発表時の高見順、ならびに『人民文庫』に拠って創作活動を続ける作家たちには、思想統制・弾圧が進む現実に対する抵抗の姿勢が持続されていた。その姿勢は、当時の「人民戦線」という言葉に象徴されていた。1936年上半期には、スペインやフランスにおける反ファシズム人民戦線の動向が伝えられ、論壇では二・二六事件後の戒厳令下にあっても「人民戦線」が話題となった。『社会評論』『時局新聞』『世界文化』『労働雑誌』といった「進歩的」雑誌・新聞が、ヨーロッパの人民戦線、日本の無産政党や労働組合における統一戦線運動の動向をさかんに伝えていた。『改造』『中央公論』や『セルパン』といった総合雑誌も人民戦線特集を組み、大森義太郎・戸坂潤などの論客が活躍していた。こうした空気の中で『人民文庫』の発行がおこなわれたのである。『人民文庫』の一員だった田村泰次郎は、「『人民文庫』の『人民』は、フランスの人民戦線（フロン・ポピュレール）という呼称からとったことは、武田自身が幾度も口にするのを聞いた」[14]と回想している。

1937（昭和12）年3月16日に実施され、無産政党が26名当選（社会大衆党22・労農無産協議会4）と躍進した東京市議会議員選挙においても、「選挙応援といへば本誌関係の高見順、新田潤、松田解子、本庄陸男、その他の諸氏も毎晩のやうに諸々の会場で一席弁じて」いた[15]。組織的なプロレタリア文化運動は1934年の段階で壊滅し、反ファシズムを標榜して33年に結成された学芸自由同盟や、「進歩的作家」の親睦団体として発足した独立作家クラブも、実質的な活動は何もなし得なかった。『人民文庫』は文化運動における人民戦線の一潮流と評価できるが、その担い手は、プロレタリア文学運動のなかで傍流に位置し、あるいはナルプから離脱した武田麟太郎や高見順たちであった。『人民文庫』に拠った作家の多くは、単純に「政治」から離れ「文学」の世界に籠もったわけではない。その「文学」の世界でめざすリアリズムとは、社会の現実をリアルに描き出すことであり、その姿勢はプロレタリア文学運動の根を残していた。粘り強い抵抗は、むしろ左翼くずれ的な作家によって続けられたのである。

『人民文庫』の執筆者グループは、創作スローガンとして「散文精神」を掲げた。「散文精神」とは――当時の悪評を以て言い表すとすれば――「糞リアリズム」のことであった。それはかつてプロレタリア文学運動のスローガンであった「プロレタリア・リアリズム」から「主題の積極性」や「党派性」を抜きにして、「労働者」や「農民」ではなく「人民」「庶民」の現実を描こうとするものであった。すなわち作者が「第一に、プロレタリア前衛の『眼をもつて』世界を見ること」（蔵原惟人「プロレタリア・レアリズムへの道」『戦旗』1928年3月）という意識をもつ必要なしに、人民の生活の中に入り込んでいくことであった。それならば「なにも事新しく散文精神云々と言はないまでも、従来どほりレアリズムといふ用語で

ものを言へばいいではないか」との疑問に対し、高見は次のように答えている。

だが、また、レアリズムに関する従来の議論の線にそひ乍らも、然し違つた視野からの発足であることの自覚が、そこに自づと散文精神といふ言葉を私どもの間に齎してきた。そして、毫も新しい言葉ではなく、又概念でもない散文精神のうちに新しく切実な脈搏を感じ、私どももそれに新しい生命を吹き込むことの義務を覚えたのである。(「小説はどんな眼鼻をしてゐるか」)[16]

いくぢのない、無気力な、平凡な人民と一緒に私は生きたい。今日の人民の物語を私は書きたい。糞面白くもない糞リアリズムと、さげすまれようと、私は人民の暗い長屋から離れて、「面白い」明るい、楽しい園遊会に遊びたくはないのである(「一個の人民」『作品』1936年6月)。

「散文精神」は、『人民文庫』執筆者グループによれば「野党精神」でもあった。それは、先にとりあげた文芸懇話会や日本浪曼派、さらには文壇の有力誌であった『文学界』に対抗し、「人民の暗い長屋」の生活を描くことによって反ファシズムの路線を守ろうとする、抵抗の精神であった。こうした「散文精神」を拠りどころにして、高見は左翼くずれや男女関係のもつれなどの頽廃を主題とした作風から、より「人民」の現実に近づこうとしたのである。

3 「生活」への接近

「外資会社」に続いて、高見順は「前後」(『自由』1937年8月)・「工作」(『改造』同年8月)・「流木」(『文藝』同年10月)を発表した。ここでとりあげる「流木」は、富山県で起こった庄川流木事件を題材にして、事件の現場のルポルタージュと作者の心境とが混然となって語られる構成となっている。1937年7月、高見は取材のため飛騨から庄川流域を旅行した[17]。当時親交のあった中村真一郎によれば、「高見順は、友人たちに向かって自分が現在の生活から脱け出せなければ、作家として駄目になると告白していたし、子供の私に向かっても、この旅行を飛躍の契機にしようと息ごんで告げていた」[18]という。「流木」のなかで、当時の作者の心境は次のように語られている。

……私は疲れてゐた。私を取り巻く情痴の世界に、そして私にはそれしか書けない情痴の小説に、私はもはや疲れてゐた。ドロドロの泥のなかにはまり込んで足掻(あが)いてゐるざまであつた。「あかんわ、もう。——僕は行きづまつた」さう言つて、酒をくらつて

をつた。「なアにを言つとる」文学の友人が笑つた。「お前の小説は、行きづまつてヤケクソで書いたといふんで、いいんだ。いい気持で書かれて見ろ、眼も当てられねえ」それもさうだ。だが、私は泥んこから浮び出たかつた。

庄川の旅に出る直前の7月7日、蘆溝橋事件が発生し、日本は中国との全面戦争に入った。その前年から『人民文庫』のような反ファシズム的、「進歩的」な文化運動は、活動の余地を奪われつつあった。36年7月10日には、講座派とよばれる経済学者や、『時局新聞』『文藝街』などの新聞・雑誌関係者が検挙される「コム・アカデミー事件」がおきた[19]。検挙者には『人民文庫』に参加していた上野壮夫も含まれており、上野は7月11日に検挙され20日に釈放された。12月には「共産党再建グループ」検挙の影響を受け、『労働雑誌』が廃刊に追い込まれた。『労働雑誌』に対しては武田麟太郎が資金を援助し、『人民文庫』の執筆者もしばしば寄稿をおこなっていた。

『人民文庫』が開催する講演会や座談会は、常に特高警察の監視下にあった[20]。36年10月25日、徳田秋声研究会を開催していた『人民文庫』執筆者グループが、無届集会を理由に新宿淀橋署に検束される事件が起こった。検束されたのは高見順・本庄陸男ら16名で、うち2名は即時釈放され、翌日に主宰者の武田麟太郎が出頭し、本庄・湯浅克衛・古澤元を除く11名が釈放された[21]。本庄ら3名も28日に釈放され、新聞は「人民戦線運動の台頭に神経を尖らし過ぎての検挙騒ぎで泰山鳴動鼠一匹も出ずの形」[22]と報じている。けれどもこの事件は全国に報道され、その影響は大きかった。『人民文庫』には、「一〇・二五の事で地方の新聞が書き立てたので我々の学校でやうやく読者のふえたこの頃全く迷惑した」(山形市形山龍「読者の頁」、1937年1月)といった投書がみえる。さらに11月20日には思想犯保護観察法が施行され、左翼前歴者に対する監視や統制はさらに厳しくなった。同法と高見との関連については後述する。

1937年に入ると、「進歩的」文学雑誌のひとつであった『文学案内』が廃刊となった。編集発行者の貴司山治が1月24日に検挙されたためである。貴司の手記によれば、『文学案内』の発行が「共産主義の啓蒙運動……共産党再建の地ならしをしたのだと検事は調書に書いていた」[23]という。武田麟太郎は、『人民文庫』6月号の「編輯後記」に危機感を募らせながら、「文学界がああいふ発展過程を辿つてゐる。文学案内が姿を見せない。本誌がいままた、発売の遅延で、種々な方面に、発行不能かと云はれてゐる。(中略)全国の従来の読者に対しても、進歩的文学雑誌の継続を遂行しなければならない」と記している。

話を「流木」に戻すと、高見は左翼くずれや情痴の執筆に行き詰まりを感じるとともに、「外資会社」で見せた左翼的積極性の残る作品を発表できる機会も失いつつあった。「ドロドロの泥の中であがいて」いたというのも、あながち誇張とはいえないだろう。その高見が、期待感をもって取材に旅立ち「流木」を執筆した。「もともと自分の感情のくぐらない事柄

を、ただ調べて書いたといふ小説に対しては、どうも信用が出来ない性質」（「流木」）である高見が、庄川流木事件の何に関心あるいは題材を見出したのだろうか。

庄川は奥飛騨に源を発し、富山湾に流れ込む全長約130 kmの河川で、大正期に水力発電のためのダム建設が計画された。これに対して、上流域で木材を伐りだし川を利用して流送をおこなっていた飛州木材会社および住民が強行に反対し、長期にわたる訴訟にもちこまれた。電力会社側は県と結託し、訴訟を退け小牧ダムが建設されるに至った[24]。この顚末を小説化しないかとの誘いを受けた「私」は、ある夜銀座のおでん屋で、東京に出て尺八吹きとなった元木材流送の人夫と出会う。その男は、「庄川に堰堤（ダム）が出来てから食へなくなり東京へ」来ていた。「――こんな乞食みたいな真似をして食はにやならん仕末に成らうとは思はなんだと鼻を啜」る男の姿に、「私」は「他の人たちはどうしてゐるのだらう。そして沿岸の住民は？――庄川へ行かうと意を決した。そこの民のくらしを見に行かうとおもつた」のだった。

高見が「自分の感情をくぐらせて」小説の主題としたのは、流木事件そのものではなく、争議が終わりダムが建設された後の「そこの民のくらし」であった。「私」は高山から御母衣に入り、庄川沿いを下りながら小牧ダムおよび青島（現 砺波市）の貯木場までをたどる。ダムの建設によって木材の流送は不可能となり、流域で出会った人々の生活は破壊され、流送人たちは北海道・樺太・朝鮮や満州などに渡っていた。「大きな力に追はれて、遠くの川に稼ぎに行かねばならぬ流送人たちの哀れな姿は、――ちやんと飼主から食ひものを当てがはれ乍らなほも欲望を逞しうするでつかい犬に、オイどけと追ひこくられた、可哀さうな宿無しの子犬の姿をひよつと頭に蘇らせたのであつた」。

「流木」では、庄川流域での生活をルポルタージュしながら、そこに「自分の感情をくぐらせ」ることによって、住民の生活を足蹴にしていった「強権」に対する抵抗の姿勢が示されている。高見は「散文精神」を、実作の上で示したのである。

日中戦争開始からほどない1937年8月21日、『人民文庫』9月号が発禁処分を受けた[25]。発行責任者の武田麟太郎はただちに処分の対象となった作品を削除し、代わりに既発表の自作「井原西鶴」を掲載して9月臨時号を発行したが、処分による財政的打撃は大きかった[26]。11月8日には中井正一・新村猛・真下信一など、京都で『世界文化』『土曜日』を発行していた知識人グループが検挙された。つづいて12月15日、日本無産党および全評（日本労働組合全国評議会）の関係者や荒畑寒村・大森義太郎・向坂逸郎といった「労農派」知識人など、あわせて446名が検挙される「人民戦線事件」がおこった。同月27日には内務省警保局から各雑誌社に対し、岡邦雄・戸坂潤・宮本百合子・中野重治らの原稿掲載禁止が内示された[27]。

おいこまれた状況の中で、『人民文庫』執筆者グループの間には、同誌の存続をめぐって対立が生じた。編集を担当していた本庄陸男・古澤元らが継続を主張したのに対し、高見に

近い『日暦』同人の多くは、弾圧による失職を恐れて廃刊を要望した。12月末、高見と新田潤が箱根の旅館に滞在していた武田のもとを訪れ、武田は『人民文庫』の廃刊を決意したという[28]。結局人民社は37年12月で閉鎖され、『人民文庫』は、同月12日に納本された1938年1月号が最終号となった。のちの1946年3月31日、武田の臨終に立ち会った高見は、日記に「『人民文庫』解散に際して、私たちの間に、確執とまではいえないが、へんな感情がわだかまるようになった」[29]と記している。

『人民文庫』の廃刊によって、日本における合法的な反ファシズム文化運動は潰えたといってもよい。そして高見は、「外資会社」のようなプロレタリア文学の名残りをとどめる作品を発表できる機会を失った。「『工作』を書いてゐる時に、中日事変の端緒と成つた盧溝橋事件が発生したのであつた。戦争が終るまで遂にそれは単行本に入れられなかつた。事変勃発とともに頓にきびしさを加へた言論弾圧の為、私は『工作』を私の左翼ものの最後の作品とせざるを得なかつた」[30]のである。

「流木」に続いて、高見は「机上生活者」(『中央公論』1938年2月)を発表した。この作品では、「外資会社」と同じくレコード会社を舞台に、会社への不満を洩らしてばかりいる門脇と、意欲的に仕事に取り組む繁森という二人のサラリーマンが描かれる。「外資会社」では物語の狂言回しである茂子によって、左翼くずれの金原と仕事人間の戸澤の双方が否定されるが、「机上生活者」では小説家志望の新入社員佐竹を通して、繁森＝戸澤タイプがよりクローズ・アップされた。佐竹が仕事のかたわら小説を書いていることを知った繁森は、次のように熱っぽく佐竹に説く。

> 「一生浮び上ることのない哀れなサラリーマンは生活してゐる。生きる甲斐のない生活かもしれぬが、然し生きてゐる」この生きてゐるといふ事、生きねばならぬといふ事を尊重してほしいと繁森は言葉を強めて言つた。サラリーマンの下らなさを書くより、その下らなさのなかで、如何に生く可きかを書いてほしい。「この頃名前を出しかけた高見順といふ小説家は矢張り以前はよそのレコード会社に勤めてゐたんだが、この男の書くものときたら、女に逃げられたの、女を欺したのといつた愚劣な小説ばかりで、折角サラリーマン生活の経験があり乍ら、その生活に対する真面目な追求を少しもしない。ああいふ奴には何も期待出来んが、佐竹君には期待する。(中略)佐竹君に書いて貰ひたいのは生きてゐる僕達、――そして僕達は机上労働の生活を如何にすべきかといふことなんだ。現在の問題は机上労働者の惨めさを惨めさとして思想することでなく、その惨めさのなかでどう生きたらいいかといふ事だと思ふんだ」

「惨めさのなかでどう生きたらいいか」は、高見がそれまで書いてきた左翼くずれものの作品では問われず、左翼くずれはこの問題に対して、いわば斜に構えていた。「故旧忘れ得

べき」に登場する澤村稔は、左翼運動で活躍した後に獄中で転向を誓い、釈放後に安定した「生活」を得てまもなく自殺した。澤村には実在のモデルがいたといわれるが、高見は自身を戯画化した左翼くずれの篠原達也に託して、次のような転向観を述べていた。

> 暗澹とした日々といふものは暗澹と戦つてゐるのであるから、そこに生きて行く為の力が矢張りあるのだと篠原は考へる。では、競馬場に勤め、「生活」が安定した時、どうして生きて行く力を失つたのだらう。「生活」が安定するとともに、彼（＝澤村、引用者注）は「生活」と戦つて行く彼を失つた。もとの彼は死んで、新しい彼が生れてきた。「思想」の彼はもう消え失せて、卑しい「生活」の彼が、周囲を見廻しはじめた。（中略）足並が遅れたのならまだしも、もはや取りかへしのつかないことになつてゐる自分を澤村は顧み、生涯どんなにあがいても自分はもう駄目だといふ絶望が彼を殺したのだと篠原は忽ちピンと感じたのであつた。

ここでは、「思想」を捨てた後の「生活」が卑しいものとして認識されている。そのため残された左翼くずれ達は、死んでいった澤村に負い目を抱かざるをえなかった。「机上生活者」で高見が繁森に吐かせた熱弁は、高見自身の左翼くずれからの脱却を示すものであった。「外資会社」で平野謙が指摘した「カチリと響く」自己再建の手応えは、時勢の圧迫を受けつつようやく明確になってきた。それは、「流木」を経て「机上生活者」において、生活——どんな状態にあっても「生きてゐるといふ事、生きねばならぬといふ事」——の肯定にいたったのである。厳しい現実のなかで、なお力強く生きようとする人間の姿こそ、高見が「自分の感情をくぐらせ」ることのできる題材であり、その人間の生活に入り込んで小説を書いていくことが高見の願いだったのである。

こうした高見の姿勢は、同世代の作家・評論家のなかで共感を呼んだ。丹羽文雄は、「机上生活者」を高く評価して次のように述べている。

> これまで氏の小説には現れなかつた意志のつよい、まるで通俗小説の儲け役のやうな偉丈夫が忽然とあらはれてくる。（中略）勢ひ硬骨漢はリアルの影うすい、如何にも作者の注文に添ふ脆い感じの男になつて現れてゐるのだが、かうした男を忽然と捉へてきたといふことに私は特に声援がしたいのである。
>
> たとへそれがはかない主張であらうとも、健康なものに憧憬れる作者の心の方向には声援の声を惜しんでなるものかと思ふのだ。また私にとつては之はひとごとでないからだ。この作者と同じやうに私もこれまでさんざんに暗いものばかり書いてきた。そしていつか自分自身がやりきれなくなつてゐるのだ。健康な明るいものを願ふ気持はひと一倍に烈しいつもりである[31]。

4　戦時体制と転向

「生活」への意欲、すなわち丹羽文雄の言葉を借りると「健康な明るいものを願う気持」を高見が公言する契機となったのは、日中戦争の開戦であった。1937年7月の盧溝橋事件以降、戦局が大々的に伝えられるなかにあって、高見は次のような主張を述べるようになった。

> 今日の小説はつくりごとの馬鹿馬鹿しさからは免れてゐる。だが戦争といふ深刻で厳粛な、大きな現実のうねりに一度直面した後の眼には、現代小説といふものが如何にも脾弱でヤクザでちつぽけな役立たずのものに見えるのだ。戦争と比較するのではない。現実のうねりによつて、いままでの小説の小ささヤクザさを今更ながら知らされるのだ。(「今日の文学」)[32]

続けて高見は、同年11月に封切りとなった映画『限りなき前進』(小津安二郎原案・内田吐夢監督)について、「大層感心」したが「映画の与へるものについて不満があつた」として、「机上生活者」と同様の主張を以下のように述べている。

> これはサラリーマンの惨めさを描いたもので、原作者の小津安二郎は、ここではメガホンを内田吐夢に委ねてゐるが、いままで自らメガホンを取つて、かうした小市民の悲しさを描いたすぐれた映画をいくつか私たちに示してくれた。批評家はその現実批判に一斉に拍手した。技法が芸術的にすぐれてゐたと共に、現実批判が映画に芸術性を与へてゐた。ところが今日、サラリーマンは惨めだといふ現実批判から、サラリーマンは何を与へられるだらうか。惨めを惨めと描くのは、今日もはや批判ではなく傍観である。サラリーマンは今更惨めな自分を見せられても何んにもならない。惨めな現実のなかにあつて、如何に生くべきか、その生き方を求めてゐる。
>
> これは等しく小説の問題である。そして又これは他へ向かつて言ふ言葉でなく、実は作者の私に与へる自己批判に他ならない。
>
> 現実が逞しい営みのなかに生きる時、人間も亦逞しく生きねばならぬ。そして小説は今日の現実の中に逞しく生きる人間を描かねばならぬ。逞しい生き方を示さねばならぬ[33]。

この文章が発表された1937年末、高見は『人民文庫』廃刊について、武田麟太郎に宛てた特高対策用の「ウソの手紙」をしたため[34]、投函せず自宅に保管していた。『人民文庫』

からの脱退を意図する文面を書いて、特高が家宅捜索に来たときにそれを押収させ、追及を免れようとしたのである。晩年、高見はこの手紙について、「当局向けのその手紙には、私たちは、思想的にははっきり『転向』しているがといった、当局の眼をごまかそうとするコソクな、醜体なことが、いろいろ書いてあったようだ」[35] と顧みている。

けれどもこの手紙に記された、戦争により小説に求められるものが変わった、という以下のような認識は、同時期に発表された著作においてもしばしば述べられており、当時の高見の本音が混じっていたと思われる。

> 事変は私たちの気持をかへました、私なぞは今まで一にも文学、二にも文学で、ジメジメした情痴小説ばかり書いてゐましたが　国家の発展といふこと　民族の運命といふことを漸く考へさせられてきました　日本民族の強い歩み、逞しい生き方といふことを文学にとり入れて、情痴に迷ふ糞レアリズムとちがつた大きな明朗な、日本の民族文学をうみたい気持、気持だけで実際はまだまだ低いところを低迷することでせうが、とにかく　さうした気持です、さうした気持は今までの人民文庫の雰囲気からは遠いもので、――少くとも私は今までの私からキツパリ離れて新しく発展するため、人民文庫と絶縁する肚でした、(後略)[36]

日中戦争開始直後、武田麟太郎は『人民文庫』37年9月号の編集後記に、「事変の勃発はわれわれの心情を騒然たらしむるものがあつた、けれども生活の流れは依然として停滞勝ちである。むしろ動かない真実は後者のなかにある。即ち日常的であると云ふことが今ではむづかしいほどだ。この月のジヤーナリズムが旺然として時局に向ふとき、それ故尚更ら、本誌は、所定の方針を生かさうとしてゐるのである」と記し、『人民文庫』が掲げる散文精神にいささかの動揺もないことを強調した。先に述べた、『人民文庫』廃刊前後における武田と高見との確執の理由には、雑誌存続をめぐる執筆者グループ間での意見対立や、親分肌で徒党を組むタイプだった武田に対する高見の反発などが指摘されている。けれどもその本質は、日中戦争下の現状に対する両者の認識の開きにあったのではないだろうか。

高見は戦争に触発されて左翼くずれの姿勢を克服し、「庶民」生活への共感と接近を色濃くした。ここで「人民」ではなく「庶民」としたのは、37年12月の人民戦線事件以降、「人民」という言葉は「人民戦線＝共産主義」を想起させる印象が強くなり、合法的な言論や出版では使用できなくなったためである。左翼くずれからの脱却は、高見文学がもっていた反逆精神の喪失を意味した。現実に適応できず、「いつでもブーブー」(エヴリタイム)(「前後」)的な左翼くずれに代わって、高見は登場人物の生活の肯定感を強調し、置かれた状況のなかでのそれなりの人物を書いた。「散文精神」が掲げていた野党性・批判精神も薄れていったのである。

「机上生活者」に続いて、高見は1938(昭和13)年に「神経」(『文藝』4月)、「大部屋の

友」(『週刊朝日』4月10日)、「湯たんぽ雀」(『文学界』6月)、「人間」(『文藝春秋』9月)を発表した。「大部屋の友」には浅草のレビュー役者が登場し、「人間」は玉の井と思われる「恥づべき巷」を舞台としている。同年4月頃から1年あまり、高見は浅草田島町の「五一郎アパート」を仕事場とした。「仕事場の意味だけでなく、色々な点で山の手的なインテリ的な、或は銀座的な自分に違つた何かを加へたいと思つたから」[37]と高見は述べている。そして、浅草を舞台とした「盛り場」(『日本評論』1938年10月)を発表した。

『人民文庫』廃刊の後、高見は旧友の高洲基とともに雑誌『新公報』を創刊した。高洲と高見は、第一高等学校在学時の1926(大正15)年、ダダイズムに影響を受けた同人誌『廻転時代』を編集発行しており、その後一高を中退した高洲は、ドイツ留学を経て東京日日新聞・大阪毎日新聞に勤務した経歴をもっていた。

『新公報』第1号は、1938年4月10日印刷・5月1日付で発行された。表紙には「綜合文化雑誌」と銘打たれ、頁数は224頁、編輯兼発行者は高洲基である。高見は「はじめは文芸雑誌をやるつもりで」高洲に小説を書かせようとしたが、高洲の方が「やるんなら綜合雑誌をやらうと言つて、ついにかういふ雑誌を出すことに成つた」[38]という。創刊号の内容は、山道襄一「大アジアの道」・海軍大佐広瀬彦太「大艦巨砲論」といった戦時を反映した時論や、創作など多岐にわたるが、「浅草たより」「劇団随筆集」「盛場新公報」「ダンスホール新公報」といった、風俗や大衆文化を扱った記事が目立つ。そのひとつである「よわきもの座談会」には、女性のダンサー・美容師とともに高見順・新田潤が参加している。新聞でパーマネントやダンスホールの自粛が話題になっていた時期であり、こうした座談会の企画や風俗記事の掲載は、戦時色の濃い世相に対する抵抗も匂わせている。

ところが、高見の推薦により編集を担当していた二瓶不二雄と井上立士は、雑誌の出来に強い不満を抱いた。二瓶は続く38年6月号の編集後記に、「創刊号は編輯部として当に愧死せねばならぬぶざまさである。第二号もこのやうなものしか出来なかつた。甚だ残念に思ふ」と記している。高見も『新公報』の発行に積極的だったようには思われない。

結局『新公報』は、6月号が安寧・風俗壊乱両方の理由で発禁処分に遭ったうえに[39]、資金繰りも行き詰まり7月号を最後にあえなく廃刊となった[40]。高見が浅草に仕事場を移して「浅草もの」を書き始める背景には、たび重なる圧迫により自らの拠点が奪われていく現実があった。

浅草での執筆生活は、「如何なる星の下に」(『文藝』1939年1月〜1940年3月)を生んだ。伊藤整が「『如何なる星の下に』に関する限り高見は天才だと思わなければならない」[41]と絶賛したように、雑誌連載時から話題を呼び、戦前期の高見文学を代表する作品と評価されている。「浅草を背景にして、心の風景を書かうと思つた」[42]との意図のもとに、主人公の「私」こと小説家の倉橋が、踊り子の小柳雅子への慕情を抱きつつ、芸人や座付きの作家など、浅草に生活しお好み焼き屋「惚太郎」に出入りする人間と関わりながら、自らの「心の

楽屋」を浮き立たせていく。けれども、無粋を承知でいえば、「如何なる星の下に」に「外資会社」や「流木」で見られた現実に対する批判的視点が欠けていることは否めず、そのことがかえって、作家としてのプロフェッショナルぶりを際だたせたともいえる。批判精神の衰退は高見本人も自覚しており、戦後まもなく執筆当時を次のように顧みている。

> 今読み返してみますと、その頃の日々にきびしく成つて行つた掣肘のため、自分の心を正面切つて吐露しえなかつたもどかしさが生々しい痛苦を以て思ひおこされるとともに浅草の風景に託してひそかにおのれ自身に向つて呟くやうに書いたもの悲しさが却つてこの作品に微妙な表情をたたへさせたことの思はぬ効果も一種微妙な苦笑を以て考へさせられるのであります[43]。

5　時局への迎合

批判精神の衰退により、高見は庶民生活への共感を媒介とする、時局すなわち戦時体制を肯定した作品を執筆する可能性が高くなっていた。けれども、それを単純に時局迎合に結びつけるのは酷であろう。本多秋五は、自分はあまり「如何なる星の下に」を理解できていないとしながらも、次の点を評価している。

> 散文精神とは現実を描いてその底に批判を忍ばせるものだという意味のことを、高見順はどこかで書いていたと思う。『如何なる星の下に』がモティーフなしに書き出された小説だというのは、その現実批判の精神が起稿当時にはしかく明瞭でも単純でもなかったという意味である。それがもし最初から単純明快であったなら、この小説は現に今あるほどの屈折と陰翳を生まなかっただろう[44]。

戦争賛美や時局迎合めいた叙述をおこなわず、浅草に生きる人々の観察に没入していくことも、韜晦とはいえ当時としては精一杯の抵抗であったと評価することもできる。他方で、「如何なる星の下に」の主人公「倉橋」は、「何か逞しい強い小説を書きたい」という、先に紹介した願望を再び述べている。

> かうした願いは、事変と共に私のうちに起きたものであつた。外から要求されたものといふより、私としては、内に自づと起きた一種生理的な欲求のやうなものであつた。だが、私にはさうした小説がどうも書けなかつた。徒らに欲求が衝き上げてくるだけで、それを小説に具体化することが出来ない。そこで、その欲求は充たされないで、私のうちに鬱積し、私は一種のヒステリーみたいに成つていた。

私は戦場へ行つたら、そのヒステリーみたいなのから救はれるかもしれないと思つた。だが、私には、同胞が生命を賭して戦つてゐるところへ、戦ひに加はれない丙種の私が行くことは、いかにも「見学」に行くみたいな感じで、どうにも気がひける思ひだつた。

『生活への強い意欲、逞しい精神力といつたものを湧き立たせるような小説』を書きたいと思っても、『私』にはどうしてもそれが書けなかった、いったところには、当時の『時局』が促すものに対する抵抗といわないまでも、それに対する妥協回避の姿勢だけは感得される」[45] と、本多秋五は評価している。けれども、こうした高見の願望は、「如何なる星の下に」に先だって完結した、「更生記」(『大陸』1938年9月〜39年2月) にもつながった。結果を言えば、「逞しい強い小説」を書こうとして、高見は思想統制の是認に手を染めたのである。

「更生記」が連載された『大陸』という雑誌は、1938年6月から41年12月まで改造社から発行された。改造社社長山本実彦による「創刊につき」にもあるように、その誌面は日中戦争の全面化から国家総動員へと向かう現実を忠実に反映したものであった。「更生記」第1回が掲載された38年9月号には、武田麟太郎の小説「成功者」があるのをはじめ、他の号にも徳永直・貴司山治・立野信之の小説やルポルタージュ、大宅壮一・木下半治・岩村三千夫の評論、河原崎長十郎・澤村貞子の随筆、須山計一・加藤悦郎の漫画など、かつてプロレタリア文化運動の担い手だった人物による寄稿が目立つ。『大陸』は、かつて『改造』で活躍していた左翼文化人に発表の場を提供していたのである。

「更生記」の冒頭には、「この物語は友人K・N君より作者に送られた長文の手記に基いて書かれる」との前置きがあり、主人公は籾山と名付けられている。籾山は、かつて左翼運動に関係し、今では「いつも、心をどこかに預けてきてゐるやうな、意志的なものをどこかに置き忘れたやうな」サラリーマンである。その籾山が、勤務している会社内に巻き起こった合併の陰謀に立ち向かうことと、那木登喜子への恋愛によって、生活に意欲を持ち始めるというのが粗筋であるが、籾山の「更生」には思想保護観察所の観察司が大きな役割を果たしていた。

思想保護観察所は、1936年5月29日公布、11月20日に施行された思想犯保護観察法に基づいて全国22ケ所に設置された。「更生記」に引用される「保護観察所の栞」という冊子には、観察所の目的が「本人（治安維持法違反に問はれた者で、起訴猶予処分を受け、又は執行猶予の言渡を受けた者、及び刑の執行を終り若しくは仮出獄を許された者）が再び罪を累ねることのないやうに、其思想並に行動を観察すると共に、本人が今後円滑なる社会生活が送れるやうに種々な方法を以てその補導に努め、よき稟質を正しく強く伸張させて、将来社会有用の働きをなさしめてゆかうとするのである」と記されている。

高見本人は、1933年7月に治安維持法違反で起訴留保処分を受け、「共産主義特別要視察

人乙」として警視庁特高第一課の監視下におかれており、敗戦に至るまでしばしば特高刑事の訪問を受けていた[46]。『高見順全集』別巻所収の「年譜」には、36年の「十一月、思想犯保護法実施により、これ以後終戦まで、しばしば保護観察官の訪問をうける」と記されている。しかし同法の第一条は、観察の対象を「治安維持法ノ罪ヲ犯シタル者ニ対シ刑ノ執行猶予ノ言渡アリタル場合又ハ訴追ヲ必要トセザル為公訴ヲ提起セザル場合ニ於テハ保護観察審査会ノ決議ニ依リ本人ヲ保護観察ニ付スルコトヲ得本人刑ノ執行ヲ終リ又ハ仮出獄ヲ許サレタル場合亦同ジ」[47] と規定しており、起訴留保を経て、結果不起訴処分を受けた者は観察の対象に挙げられていない。保護観察法の解説が記されたパンフレットにも、「例へば起訴留保の処分を受け、刑の執行停止を受け、又は刑の執行免除を受けた場合等には、本法による保護観察を加へても実効がないので、その適用を見ないことになつて居る」[48] とも記されている[49]。

「更生記」で保護観察所に出頭した籾山は、シンパ的行動のために検挙され、「長い拘留ののち起訴留保処分で釈放された。——釈放される時、彼は転向を誓つた」と、高見自身と同様の経歴が設定されている。高見のように保護観察法では対象外とされた元思想犯にも、実際には影響が及んでいた可能性もあるが、その実態については機会を改めて検討したい[50]。

ある日、籾山は保護観察所から呼び出しを受け、「なんともいへない暗い気持に襲はれるのをどうすることも出来なかつた」。出頭した籾山は、大槻という観察司と面談する。大槻は「お話では、どうもデカダンといふやうなものに陥つてをられるやうですね。生活といふことを、もつと積極的に考へて頂くといいんですがね」と籾山を励ました。大槻の「熱情と誠実のこもつたその話し振りにぢツと耳を傾けてゐると、籾山は日頃のぐうたらで腐つたやうに成つてゐる頭の一部を快く叩かれる想ひであつた」。

日曜日に訪ねてきた大槻に対し、籾山は会社内に競争会社との合併の謀略が存在することを相談する。大槻は次のように籾山を激励した。

> ——あなたに取つて、これはあなたを更生させる上に大変いい機会だと思ひますよ。といふのは、この前もちよつと申上げたが、この間のあなたのお話などから察すると、あなたはいはば生活といふものにすつかり背を向けてそれを真面目に考へようとしてないやうに思はれるんです。言葉が乱暴ですが、勘弁して下さい。これはあなただけでなく、転向者のなかに沢山さういふ人がゐるんですが、その人達に僕はいつも、思想と生活を一緒くたにするな、思想を捨てたからッて生活を捨てるのはどうかと言つてゐるんです。これを、あなたにも言ひたい。生活といふものを、積極的に考へて頂きたいんです。そしてそれを通して、同時に、日本民族の思想といふものを新しく把握して貰ひたいんです。

かくして籾山は、「生活の意志といったものを」呼び覚まされて、合併の陰謀に敢然と対抗する。籾山が仕事に奔走する場面を、作者は籾山つまり「K・N」の手記をそのまま引用するという形で描いており、「僕」すなわち籾山の手記には次のように記される。

> 進撃的な、さうだ、僕は陰謀に対してやるぞといつた進撃的な気持だつたわけではない。いはば生活そのものに対する進撃的な感情、意欲、――その激しく鮮やかな脈打ちを僕は犇々と感じてゐた。ずつと何処かへ置き忘れたやうに成ってゐた感情、失つて了つたやうな意欲である。僕はそれを赤熱した烙印が皮膚の上に落とされた様な痛みと確かさで、取り戻した事をはつきりと感じた。
>
> 痺れるやうな更生の喜びが、僕のうちに涌き立つてゐた。

「更生記」は、高見が「外資会社」「机上生活者」などにおいて、サラリーマンを主人公に「生活の意欲」を模索してきた延長上にある。籾山が「更生」するに至る産婆役をつとめた大槻観察司は、教条的な思想善導をおこなうでもなく、転向者に親身に接する好人物として描かれる。しかしながら、左翼運動の放棄から思想の放棄、さらには日本賛美・戦争協力へと、「転向」の意味を深化させた要因である思想犯保護観察制度が、「更生」の媒体として作品のなかに位置づけられたのである。大槻の言葉に示されるように、「思想」を捨てて「生活」を積極的に考えることは、ナショナリズム礼賛あるいは体制支持という、もう一方の「思想」に近づくことを意味していた。少なくとも「流木」や「机上生活者」では、庶民やサラリーマンの現実の中から「生活」を汲み出そうとしていた。「更生記」においてその意図は、思想統制への恭順を結果してしまったのである。

ところが、すでに久保田正文が指摘しているように[51]、「更生記」の結末は微妙である。生活への意欲を獲得して会社を陰謀から救った籾山は、その勢いをもって那木登喜子に求愛した。しかし登喜子は籾山から離れていく。登喜子の兄の那木秀一は、籾山とは大学の同級生で親友であった。那木秀一は左翼運動に身を投じ、籾山は「思想的には左傾してゐたが、那木のやうに実行運動に飛び込む決心がつかず、那木に熱心に説かれても、シンパ以上に出ることが出来なかつた」。そして那木は検挙されて、肺病を病み命を落とす。つまり那木秀一は、かつて高見が「故旧忘れ得べき」や「嗚呼いやなことだ」などで描いた、左翼運動に殉じる形で死んでいった人物である。これらの作品の主人公である左翼くずれは、死んでいった非転向者に対する負い目から免れることができず、頽廃に身を任せていた。「更生記」の籾山は、その負い目を乗り越えて「痺れるやうな更生の喜び」を獲得した。

「更生記」の最後で、登喜子は「以前のような籾山だつたら、そして以前のやうな自分だつたら、軽い悪戯気に似た気持ちで求愛に応へたかもしれないがと呟くやうに言つた」。籾山は、更生はできても恋愛は成就できなかったのである。この一文が加えられていなければ、

「更生記」は、単純に思想犯保護観察制度を宣伝する小説に陥っていた。権力に棹さしての「更生」をテーマとしながらも、それに対する抵抗を、高見がぎりぎりの地点で忍ばせた可能性もある。

おわりに

本稿で最初に紹介した「外資会社」のなかで、左翼くずれの金原が主人公の茂子にむかって次のように語る場面がある。

> 「――僕には生活の目標といつたものがないんですよ」金原が言つた。兄もよく言ふ言葉だと茂子は思つた。「――で、僕は毎晩酒を飲んだりしてデカダンになつてゐるものだから、疲労が積りつもつて御覧の通り疲れてゐる始末なんです。だが僕はそのうち……」と言ひ淀んだのち「気障な言葉だけど、生きる喜びといつたものを見付けて生活を建て直さうとおもつてゐるんです」

「外資会社」では、金原が「生きる喜び」をみつけることなく、「悄気た陰惨な顔をして」茂子の前から「ソソクサと立ち去」り物語が終わる。それから2年後に発表された「更生記」では、同じ左翼くずれの籾山が思想犯保護観察司の助言を受けながら、「生活そのものに対する進撃的な感情、意欲」の喜びを獲得するにいたった。

高見順は、『人民文庫』が掲げた「散文精神」を拠りどころに、人民の現実の生活を描こうとした。その姿勢は、思想や表現の自由が奪われていく情勢の中で、現実に批判的な視点を持ち続けることにつながった。その一方で、高見は「生活の逞しさ、力強さ」を獲得しようとした。その大きな契機となったのが、日中戦争の開始である。『人民文庫』廃刊前後の時期、高見と武田麟太郎の間には、戦争に対する認識において大きな開きがあったといってよい。ただしその背景には、『人民文庫』執筆者グループの検束や発禁処分、高見本人に対する特高の監視といった、たび重なる圧迫があったことを忘れてはならない。

1939（昭和14）年以降、高見や『人民文庫』に参加した作家たちは、国策への協力を本格化させていった。同年1月、「大陸開拓文芸懇話会」が拓務省の斡旋で創設された。同会の目的は「大陸開拓に関心を有する文学者が会合して関係当局と緊密なる連絡提携の下に、国家的事業達成の一助に参与し、文章報国の実を挙ぐることにある」（『文芸年鑑』昭和十五年版）と紹介されている。福田清人・近藤春雄をはじめとする29名の会員には、元『人民文庫』執筆者グループの九名（荒木巍・田村泰次郎・湯浅克衛・石光葆・井上友一郎・大谷藤子・立野信之・高見順・矢田津世子）や、多くの旧プロレタリア作家が含まれていた[52]。

翌1940（昭和15）年、高見順は文芸家協会が主催する第一次文芸銃後運動に参加し、横

光利一・林芙美子・浜本浩・高田保とともに四国での巡回講演をおこなった[53]。さらに、「文学者たる自己の立場を新たに自覚し、文化面よりの大政翼賛に協力、以て国民としての公務を果さんことを宣言」[54] する、日本文学者会の創設にも参加した。

ところが、高見は、時局が文学に求める「逞しさ」に応じようとすると同時に、「身は売っても芸は売らない」の矜持をもって、題材の自由を権力の介入から守ろうとした。その精神のあらわれが、「文学非力説」(『新潮』1941 年 7 月) である。高見は「生活に於ける小なるもの、そこに非力な文学の自然な対象があり、それを取りあげることのうちに、文学ならではの仕事があるのだ」という持論を述べ、文学が国策イデオロギーに制約されることに異議を唱えた。日中戦争が開始されてまもなく、高見は「いままでの小説の小さきヤクザさ」を自嘲した。その小ささ・非力さを、文学の特質として擁護しようとしたのである。

国策を支持し戦争に協力する言動と、またそれに抗して文学の独自性を守ろうとする思想は、高見順という人間の中に共存していた。太平洋戦争開戦前後の時期の高見については、機会を改めて検討したい。

補注

1) 拙稿「『左翼くずれ』の肖像—高見順の転向—」『学習院大学文学部研究年報』50 号、2004 年 3 月。
2) 中島健蔵「高見順」『文藝』1939 年 9 月。『高見順全集』(1970〜77 年　勁草書房) 別巻所収。
3) 高見は大学を卒業した 1930 年から日本蓄音機商会 (コロムビア・レコード) に勤務し、36 年に新聞連載小説『三色菫』(『国民新聞』6 月 15 日〜12 月 19 日) の執筆を機に退職した。プロレタリア作家同盟の一員としての活動から検挙・勾留、転向と挫折、「故旧忘れ得べき」の執筆を経て作家として脚光を浴びるまでの約 6 年間を、高見はコロムビア・レコードに勤務しながら過ごした。
4) 石光葆『高見順』1969 年　清水書院。
5) 平林たい子「高見順論」『群像』1959 年 7 月 (『高見順全集』別巻所収)、前掲拙稿参照。
6) 『人民文庫』について時代背景も含めての詳細な解説として、小田切秀雄「解題と解説と『人民文庫』—現代文学史の分岐点で—」(復刻版『人民文庫』解説・総目次・索引、1988 年　不二出版)。
7) 武田麟太郎「挨拶」『人民文庫』1937 年 3 月。
8) 「昭和文学盛衰史」(『高見順全集』第 15 巻)、「社会主義的リアリズムの問題その他—中日事変前の一時的昂揚期—」『近代文学』1954 年 6 月。
9) 「『忘れちや嫌よ』の禁止」『人民文庫』1936 年 9 月。「忘れちやいやよ」の発禁は 6 月 25 日付、『東京朝日新聞』7 月 22 日参照。
10) 「読者の頁」『人民文庫』1936 年 8 月『北海道帝国大学新聞』1936 年 6 月 9 日。
11) このほか、11 月 14 日、東北帝国大学医学部中央講堂において武田麟太郎を講師とする文芸講演会が開催され、200 人を集めた (「文芸講演会報告」『人民文庫』1936 年 12 月、『東北帝国大学新聞』1936 年 11 月 18 日)。
12) 「文芸講演会報告」『人民文庫』1936 年 12 月。

13) 宮西直輝『青春の選択—宮西直輝の場合—』1992年　ウニタ書舗。

14) 田村泰次郎『わが青春文壇記』1963年　新潮社。

15) 「人民社だより」『人民文庫』1937年4月。

16) 『高見順全集』第13巻所収。「解題」によれば発表年月日および発表誌紙は不明、原稿脱稿の日付は1936年11月27日。

17) 日本近代文学館所蔵高見順資料「高山　小白川　大牧温泉旅行　出費表」。

18) 中村真一郎「解説」『高見順全集』第9巻。

19) 長岡新吉『日本資本主義論争の群像』(1984年　ミネルヴァ書房)、拙稿「時局新聞の軌跡」復刻版『時局新聞』(1998年　不二出版)。

20) 高見「昭和十一年前後」『本の手帖』1961年11月、『高見順全集』第17巻所収。

21) 『東京朝日新聞』1936年10月26日。

22) 『東京朝日新聞』1936年10月30日。

23) 伊藤純編注「貴司山治遺稿　私の文学史」http://www.parkcity.ne.jp/~ito-jun/bun1/framepage.htm。貴司は37年いっぱい留置され、翌38年5月20日に起訴猶予の処分を受けた。

24) 庄川流木事件については、『庄川町史』(1975年)・石山賢吉『庄川問題』(1932年　ダイヤモンド社)・山田和『瀑流』(2002年　文藝春秋)など参照。

25) 内務省警保局図書課『出版警察報』108号。発禁理由は、中山今朝春の詩「閃めく」が「今事変ニ関連シテ戦争ノ恐怖ヲ誇示シ反戦思想ヲ宣伝スルモノト認メラレ」たこと、間宮茂輔の小説「あらがね」が「左翼的意識ノ昂揚ヲ目的トシテ（略）直接行動誘発ノ示唆的効果大ナリト認メラレ」たこと、さらに平林彪吾の小説「女の危機」が「風俗ヲ壊乱スル虞レアリ」と見なされたことであった。

26) 武田「臨時号発刊に当つて」「編輯後記」『人民文庫』1937年9月臨時号。

27) 宮本百合子「一九三七年十二月二十七日の警保局図書課のジャーナリストとの懇談会の結果」『新日本文学』1952年1月。

28) 高見「昭和文学盛衰史」『高見順全集』第15巻所収。浦西和彦・児島千波編『人物書誌大系21　武田麟太郎』(1989年　日外アソシエーツ)。

29) 『高見順日記』第6巻（1965年　勁草書房)。

30) 「あとがき」『高見順叢書4』(六興出版社　1950年)、『高見順全集』第9巻所収。

31) 「文芸時評—三十代作家の熱意　時代を反映する年齢—」『読売新聞』1938年1月28日。

32) 33) 『読売新聞』1937年12月4、8、14日（原題「現実は甘皮をむいた—今やヤクザな感じの小説—」「文学よ逞しく生きよ—生活的な小説への待望—)『高見順全集』第13巻所収。

34) 日本近代文学館資料叢書『文学者の手紙6　高見順』(2004年　博文館新社）所収の十重田裕一解題参照。

35) 『続高見順日記』第5巻、昭和40年3月2日。

36) 日本近代文学博物館蔵、武田麟太郎宛高見順書簡。前掲『文学者の手紙6　高見順』収録。

37) 「酸漿市」『読売新聞』1938年7月22日、『高見順全集』第19巻。高見が戦後に執筆した自伝小説「深淵」(『日本小説』1947年5月～48年6月、『高見順全集』第3巻所収）では、T（武田麟太郎）とその「取り巻き」から逃れたかったことが主な理由とされている。

38) 高見「二人三脚」『新公報』1938年5月。

39) 内務省警保局図書課『出版警察報』112号。発禁理由は勝田貞次「戦時体制と生活程度—物資窮乏による統制の強化—」などで、同論文は、「日本に軍需インフレが進めば進むほど、Bread

for Cannon 又は Butter for Cannon の原則に従つて日本国民の生活程度は低下」し、「それにつれて物価は騰つても景気は悪くなる。不足の苦痛は増大して行く」ことを率直に述べた内容であった。6月号には高見による巻頭言「六月の手紙」が掲載されたが、高見本人が所蔵していた同号（日本近代文学館蔵）では切り取られて見ることができず、『高見順全集』にも収録されていない。

40) 前掲『文学者の手紙6 高見順』所収、高見宛高洲基書簡（1938年7月9日）。

41) 伊藤整「解説」『如何なる星の下に』1955年 角川文庫。『高見順全集』別巻所収。

42) 「あとがき」『如何なる星の下に』1940年 新潮社。『高見順全集』第1巻解題より引用。

43) 「あとがき」『如何なる星の下に』1947年 鎌倉文庫「現代文学選」、『高見順全集』第1巻解題より引用。

44) 45) 本多秋五「解説」『高見順全集』第1巻。

46) 国立公文書館所蔵「共産主義特別要視察人乙号原簿」。

47) 荻野富士夫編『治安維持法関係資料集』第3巻、1996年 新日本出版社。

48) 長野保護観察所『思想保護概要』1938年。

49) 高見の妻秋子は、日中戦争開始のころについて次のように回想している。秋子の記憶では、特高による視察と保護観察司との区別が判然とされていない。

> そのころ高見はまだ保護観察中の身分でしてね、しょっちゅう特高の人が私服で来ていました。私ははじめ特高とは分からず、穏和な中年の人だが、何の人だろうと思っていました。ときどき高見の部屋に上がりこんでは雑談したり、いっしょに住んでいた義母の古代の機嫌をとるように映画の切符をもってきたり、ヘンな友だちだなと思っていましたが（中略）その人はしんから高見を転向させようと思っていたらしく、私なんかにもたまに天照大神の話をしてくれたりするので、だんだんに正体が分かってきました。ほんとにうっとうしい時代でした（「回想の高見順」『オール読物』1991年6月）。

50) 東京保護観察所『草創半年に於ける活動概況』（1937年5月、東北大学史料館蔵）には、思想犯保護観察法が施行されてまもなく実施された、名簿を作成する「基本的調査」が以下のように記されており、高見のような留保処分者も調査の対象となっていたことがわかる。

(1) 治安維持法違反事件中東京刑事地方裁判所言渡しの執行猶予者八二五名の名簿（紙数三一枚）
(2) 同実刑を科せられたる者六二一名の名簿（紙数二四枚）
(3) 同公判中の者三四名の名簿（紙数二四枚）
(4) 同検事局に於て留保処分に付せられたる者一八八九名の名簿（紙数七二枚）
(5) 同直に不起訴処分に付せられたる者六一一名の名簿（紙数一五枚）
(6) 東京保護観察所管内刑務所より将来出所する予定の者七六名の名簿（紙数五枚）
合計紙数一四九枚
合計人数四〇五六名

更に十二月十一日より同月十五日に亘り、同じく東京刑事地方裁判所検事局思想部に出張し、藤井、毛利両保護司の下に、右検事局に於いて、留保処分に付せられたる者の内、東京保護観

察所へ通知さるゝ予定の者九名につき予備調査を遂げ、十二月十六日より二十三日まで、各自担当事件の調査に当つた。

51) 久保田正文「解説」『高見順全集』第2巻。
52) 福田清人『大陸開拓』(1939年 作品社)。
53) 日本近代文学館所蔵高見順資料「講演旅行日程表」文芸家協会編『文芸銃後講演集』(1941年)。
54) 日本近代文学館所蔵高見順資料「日本文学者会趣意書」。

「左翼くずれ」からの脱却
――高見順の転向と戦時体制の進展――

桑尾光太郎

高見順は、プロレタリア文学運動に参加し検挙・転向を経て、作家として注目されるようになった。高見の転向は、マルクス主義から日本賛美へ、あるいは戦争支持への転向といった、極端なものではない。高見が描く左翼くずれは、ファシズムに対する抵抗性を持続しており、その基盤は雑誌『人民文庫』にあった。本稿では、その左翼くずれの姿勢が、戦時体制の進展のなかにあってどのように変容していくかをみていく。

武田麟太郎を中心としてかつてのプロレタリア作家が集まった『人民文庫』は、「散文精神」を創作スローガンに「人民の現実」を描くことを提唱した。そして文藝懇話会や日本浪漫派を強く批判するとともに、読者との関係を重視して座談会や講演会を積極的に実施した。『人民文庫』によるプロレタリア文化運動壊滅後の粘り強い文化的抵抗は、左翼くずれ的な作家によって続けられた。高見もそのスタンスに拠って、現実を批判する視点を小説のなかに取り入れた。同時に、左翼くずれの頽廃や男女の情痴の世界から抜け出し、庶民の生活を積極的に描く作品の執筆をめざした。

日中戦争の開始と『人民文庫』の廃刊は、高見にとって大きな転機となった。戦争を「現実の大きな営み」と捕らえた高見は、「強く逞しい生活を描いた小説」の必要性を繰り返し述べた。「生活」の積極的な肯定は、左翼くずれや「散文精神」がもっていた現実に対する批判精神の解消につながっていく。そして思想犯保護観察制度に題材をとり、左翼くずれが保護観察司の力を借りて「更生の喜び」を得るという小説「更生記」を発表するに至った。批判精神という「思想」を捨てて「生活」を獲得することは、体制支持というもうひとつの「思想」に近づくことを意味していた。

けれども、こうした高見の転向は、数々の思想統制や特高警察らによる圧迫のなかで進行しており、それが本心からの転向であったか否かの評価は難しい。新体制運動から太平洋戦争にいたる時期において、国策に沿って戦争に協力する言動と、文学の独自性を守ろうとする抵抗の精神は高見に共存していたのである。

キーワード【転向　左翼くずれ　『人民文庫』「散文精神」　生活】

Breakaway from *SAYOKU-KUZURE*: Jun Takami's *Tenko* under the Wartime Regime

Kotaro KUWAO

Jun Takami was known as a famous writer in Japan. He joined movement of proletarian literature in 1930's. Under his arrest, he declared the desertium of movement of proletarian literature, which was called *Tenko*. But his *Tenko* was not in such an extreme form as an ultranationalist or supporter of wage war. Takami was still against fascism on drawing story of *SAYOKU-KUZURE*. His activity as writer was based on the magazine named *JINMIN-BUNKO*. This paper analyzes how his attitude of describing *SAYOKU-KUZURE* had been transformed in the war time regime.

JINMIN-BUNKO presided by Rintaro Takeda and mainly contributed from ex-proletarian literature was advocated to *SANBUN-SEISHIN* describing real life of people. *JINMIN-BUNKO* moreover severly criticized the literacy consultation group or the Japan romantic school, and held conversazione or a lecture meeting as regards the importance of relationship of subscriber. Its patience of protestation after destruction of proletarian culture movement was continued by *SAYOKU-KUZURE* wiriers. Takami was one of them, and he

took the view of criticizing reality of society in his work. In consequence he was released from decadency of *SAYOKU-KUZURE* and sought affirmatively to draw life of people.

Outbreak of war against China, and discontinuation of *JINMIN-BUNKO* were great turning points to Takami. He apprehended war was a real great activity done by human beings, and he repeatedly the necessity of works describing people's strong and sturdy life. His style of description was connected to decline of *SAYOKU-KUZURE* or *SANBUN-SEISHIN*'s criticism to people's real life. Thus Takami published his work entitled *KOSEIKI*. The story contented that at the probation system of political offenders, *SAYOKU-KUZURE* had got to acquire joy of regeneracy supported by a probation officer. His abandoning the ideology of criticism and acquiring apprehension of citizen's real ordinary life was meant to be close to another ideology of adherents of government directivity towards war.

But as this ideological conversion of Takami was done under the suppression by official thought control or under oppression by the thought police, it is difficult to appreciate whether his ideological conversion depended on his conscience or not. From the period of the New System Movement to the Asia-Pacific War, utterances supporting war along National Policy and spirit of protestation for conserving original value of literature coexisted into Takami's thought.

key words: Tenko, SAYOKU-KUZURE, JINMIN-BUNKO, SANBUN-SEISHIN, life